

府食第69号
令和8年2月17日

食品安全委員会委員長 祖父江 友孝 殿

研究・調査企画会議事前・中間評価部会
座長 祖父江 友孝

令和7年度食品健康影響評価技術研究課題の中間評価結果並びに令和8年度食品健康影響評価技術研究の採択課題（案）及び事前評価結果について

このことについて、令和8年2月6日に開催した令和7年度研究・調査企画会議事前・中間評価部会（第10回）における審議の結果、別添1及び2のとおり取りまとめましたので、報告いたします。

(別添1)

令和7年度

食品健康影響評価技術研究課題の
中間評価結果について

令和8年2月
食品安全委員会

研究・調査企画会議
事前・中間評価部会

令和7年度食品健康影響評価技術研究の中間評価結果

令和7年12月から令和8年1月にかけて開催した研究・調査企画会議事前・中間評価部会において中間評価（書面及びヒアリング審査）を実施した。

令和6年度または令和7年度に採択し、令和8年度への研究継続を予定している11課題を評価の対象とし、11課題すべてについて「令和8年度への継続が必要」とするとともに、評価所見等を取りまとめた。

課題番号	JPCAFSC20242406	研究期間	令和6年度～令和8年度 (3年間)	
代表者名	平原 嘉親	所属機関	摂南大学	
課題名	ばく露量推定の精緻化に資する食品の喫食量調査手法に関する研究			
研究概要	日本人が食品から摂取する汚染物質や食品添加物等の食品健康影響評価をよりの確とする目的で、①食品の喫食量の実態把握に適した食事調査手法を解析・整理する、②標準調理法（スタンダードレシピ）の情報を整理し、開発するとともにそのレシピの有用性を実証する。③食品の喫食量データのデータベース構築などデータサイエンス手法を用いた食事調査データの利活用についての指針作成に資する研究を実施する。			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・食品安全委員会事務局と連携の上、調査すべき情報を収集・整理しつつ、重点項目を明確にしていきたい。 ・食品添加物摂取量推定のためには加工食品喫食量だけでなく加工食品の添加物濃度データが必要である。 ・食品添加物摂取量を、喫食量と添加物濃度の積和で推定することの妥当性（生体試料・陰膳等を用いた実測値に基づく推定摂取量との比較）が検討されていない。 ・サプリメントデータベース案の中で、「ダイエット食品錠剤」、「ダイエット食品（プロテイン粉末）」とある箇所の、「ダイエット」の明確な定義を定めて研究を進める必要がある。また、サプリメントに関するデータベースをアップデートする方策を提案していただきたい。 ・現行の食品添加物に関するマーケットバスケット調査で不十分な点は何か、なぜ食品の調理過程における二酸化硫黄の消長を考慮する必要があるのかを明確にした上で研究を実施していただきたい。 			
評点	2.8/5点満点		継続の要否	継続

課題番号	JPCAFSC20252501	研究期間	令和7年度～令和8年度 (2年間)	
代表者名	吉成 浩一	所属機関	静岡県立大学	
代表者名	親化合物の毒性試験情報を活用した農薬代謝物のインシリコ毒性予測に関する研究			
研究概要	<p>食品健康影響評価において、農薬代謝物の安全性評価が世界的に求められつつあるが、代謝物標品の入手はしばしば困難であり、インシリコ毒性評価手法の開発が必要とされている。しかし、反復投与毒性などの全身毒性のインシリコ予測手法の開発は進んでいない。</p> <p>本研究では、農薬評価書の親化合物及び代謝物の毒性試験結果を利用し、親化合物の情報から代謝物の毒性をQSARや機械学習、リードアクロスなどのインシリコ手法により予測するケーススタディを実施する。その際、生物反応性・体内動態の予測値を活用し、機序を踏まえた予測を行う。これにより、農薬代謝物の毒性予測におけるインシリコ手法の有用性と限界を明らかにすることを目指す。</p>			
評価所見	順調に研究が進展しており、成果が期待できる。			
評点	4.0/5点満点		継続の要否	継続

課題番号	JPCAFSC20252502	研究期間	令和7年度～令和8年度 (2年間)	
代表者名	広瀬 明彦	所属機関	一般財団法人化学物質評価研究機構	
課題名	ベイズ論的アプローチを用いたベンチマークドース法の適用に関する研究			
研究概要	<p>健康影響評価値を算定するための出発点となるPODを統計学的に算出できるとされているベンチマークドース法については、国際的にはベイズ推定に基づく手法が主流となりつつあるが、未だ行政的な実用例に乏しく実際のリスク評価で活用する場合のガイダンスや指針等が必要であると考えられる。本研究では、先行研究におけるベイズ推定において重要とされる事前分布の特徴や注意点等を整理した知見を基に、ベイズ法に基づくBMDソフトウェアのデフォルト設定での限界や、様々なパラメータの設定方法、モデル平均化の妥当性検証等に関する方法やその考え方を整理して、ベイズ論的アプローチによるベンチマークドース法の適用指針案を作成する。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・順調に研究が進展しており、成果が期待できる。 ・用量反応性の分析に関しては課題が残ることから、更なる検討が期待される。 ・今回の研究結果に準拠して多くの毒性試験データを解析していくにあたり、BMAMBERとToxic RのBMDLの差が大きく、BMDL採用基準不適合と考えられた場合、そのデータセットは全く有効活用されないのか、あるいは全く別の試験機関で得られたデータで例えば実験に用いられたDose rangeが近いものを総合して用いて活用することはできないのか、検討いただきたい。 			
評点	4.0/5点満点		継続の要否	継続

課題番号	JPCAFSC20252503	研究期間	令和7年度～令和8年度 (2年間)	
代表者名	久米 利明	所属機関	富山大学	
課題名	魚類を用いた PFAS の発生発達毒性評価法の確立と機序の解析			
研究概要	<p>有機フッ素化合物である PFAS は、撥水性や耐油性、化学的安定性に優れ、工業製品や日用品に広く使用されてきたが、その一部である PFOS・PFOA・PFHxS は環境中での難分解性とヒトや生態系への高蓄積性が問題視されている。本研究では、多くの検体を同時に評価することが可能なゼブラフィッシュをモデルとして、種々の PFAS 化合物を用いて発生発達毒性評価法を確立し、さらにタンパク質発現解析や内分泌系の影響を中心にその毒性発現メカニズムを解析する。これにより、PFAS の毒性評価とそのリスク管理に必要な科学的基盤を提供することを目的とする。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・順調に研究が進展しており、PFAS 評価系に応用可能になることが期待される。 ・ヒトへの外挿性や動物の <i>in vivo</i> 試験との共通性などの課題を解決しながら進める必要があるが、最終的には様々な毒性物質の評価に応用できるスクリーニング系の確立を期待する。 ・研究結果を踏まえて、ヒトへの影響の外挿性を検討いただきたい。1群の匹数を 30 以上として、平均値、標準誤差を示して統計検定をすることで、より正確な解釈ができると考えられる。 ・測定項目の選択や適切なポジティブコントロールの採用などのブラッシュアップが必要である。また、現在実施している PFAS 化合物の濃度をもっと細かく変化させた追加実験の必要があると考える。 			
評点	3.8/5 点満点	継続の可否	継続	

課題番号	JPCAFSC20252505	研究期間	令和7年度～令和8年度 (2年間)	
代表者名	鈴木 周五	所属機関	大阪公立大学	
課題名	有機フッ素化合物の生体内動態を加味したヒトへの毒性評価法の開発			
研究概要	<p>有機フッ素化合物(PFAS)は幅広い用途で使用され環境中に広く存在し、難分解性及び生体内蓄積性によりヒトへの健康影響、特に肝臓に対する毒性が懸念されている。動物を用いた毒性評価が報告されているものの、ヒトへの毒性を外挿するには代謝酵素や感受性が種属で異なるため困難である。本研究では、ヒト化肝臓マウス及び不死化ヒト正常肝細胞株を用いて、PFASのヒト肝細胞への毒性影響とその機序を解明するとともに、げっ歯類やin vitro系の実験結果との相違を基に、ヒトへ外挿可能な成果を提供する。これらの結果は、PFASのヒトに対するより直接的な毒性評価に繋がり、国民の健康や安全、安心に大いに寄与する。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・計画どおりの研究推進を期待する。 ・ヒト化肝臓マウスを使って、ヒト肝発がん過程の検討が可能かの見極めが必要である。また、ヒトへの外挿性も留意いただきたい。 ・ヒトの肝機能の個体差は大きく、得られる結果に差異が出てくることが想定されるため、ヒト化肝臓マウスの樹立のためのヒト肝細胞を多量に確保しておく必要があると感じる。また、不死化細胞については、培養中に性質が変化しうることを考慮する必要がある。研究に用いる肝細胞のシトクロム P450 (P450) 等の薬物代謝酵素活性については、複数の P450 分子種について確認しつつ研究を進める必要がある。 			
評点	3.6/5点満点		継続の要否	継続

課題番号	JPCAFSC20252506	研究期間	令和7年度～令和8年度 (2年間)	
代表者名	山崎 栄樹	所属機関	国立医薬品食品衛生研究所	
課題名	カンピロバクターに関する定量的データに基づくフードチェーンを通じたリスク評価			
研究概要	<p>カンピロバクター食中毒に関しては、これまで様々な調査研究によって鶏肉の生産から消費の各段階で科学的知見の集積が進められてきた。一方で、これらの情報を統合したフードチェーン全体に対する定量的リスク評価は実施されていない。本研究では、蓄積された定量的データに対して数理疫学モデルを適用した定量的リスク評価を実施し、定量的目標数値との紐付けが可能な鶏肉消費による健康影響評価を行う。加えて、これまでに定量的データ蓄積の少ない鳥刺しやVBNC (Viable But Non-Culturable) 状態等の本菌特有の因子がリスク評価結果へ及ぼす影響についても検討を行う。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・計画どおり研究が進捗していると判断できる。 ・患者数推計により精緻化を行えるように改善していただきたい。 ・リスク管理の要素も含まれるが、リスク評価の観点からの有用性をアピールした研究にしてほしい。 ・実測可能な推定値と実測値との比較による妥当性の検討をしていただきたい。 			
評点	3.9/5点満点		継続の要否	継続

課題番号	JPCAFSC20252507 (※)	研究期間	令和7年度～令和8年度 (2年間)
代表者名	小山 健斗	所属機関	北海道大学
課題名	病原微生物のばく露評価に資する日本国内データベースの構築		
研究概要	<p>現在の日本国内では行政機関や研究所、大学などで、食品のリスク評価の専門家がアクセスできる病原微生物のばく露評価に資する日本国内データベースがなく、属人的に情報が集約され課題の共有が困難である。そこで本研究では、リスク評価に関わる定量的データの共有を目的とし、病原微生物の汚染実態の定量的データ収集、整理、解析を通して、デジタル基盤を構築し、定量的データ共有の効率化を実現する。そのために学術論文や各種行政報告書を元に 1) リスク評価の定量的データを収集し、2) データベースを構築して、3) 病原微生物の汚染実態を推定し、リスク評価の省力化と高精度化を図る。</p>		
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・初年度の研究は順調に進捗しており、データベースの構築・可視化を行なったことは高く評価できる。次年度は、文献に記載のないデータの収集などにも留意したデータベースの充実や、ベイズ推定を活用した微生物の汚染実態推定に関する成果に期待したい。 ・確率論的リスク評価への活用について、更に検討いただきたい。 ・ヨーロッパのヒアリング調査にて「食品のカテゴリを明確に区分すること」は研究成果報告書に記載いただきたい。 		
評点	4.0/5点満点	継続の要否	継続

※食品健康影響評価を担う若手専門家の育成枠

課題番号	JPCAFSC20252508 (※)	研究期間	令和7年度～令和8年度 (2年間)
代表者名	扇谷 昌宏	所属機関	旭川医科大学
課題名	ミクログリアに着目した食品の次世代神経毒性評価システムの開発研究		
研究概要	<p>食品の神経毒性は細胞・動物レベルで十分な評価系が構築され、我が国の食品安全に寄与してきた。しかしながら、それらの多くは齧歯類の神経細胞を対象とする研究であり、ヒト（臨床）レベルで神経細胞以外の脳細胞を対象とした評価系は存在していない。</p> <p>本研究は、申請者が開発したヒト末梢血誘導型ミクログリア細胞技術（国際特許取得済）を用いて、神経毒性を中心とする新たな食品健康影響評価技術の開発を行い、従来検討されてこなかった神経細胞以外の脳細胞に対する毒性を臨床レベルで明らかにし、科学的根拠に基づく食品安全行政に寄与することを目的としている。</p>		
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> • OECD など国際機関の動向を踏まえ、チャレンジングな研究については最後まで粘り強く本研究を進めていただきたい。 • ミクログリアの障害が発達神経毒性（DNT）にどのように関与するのかを明確にした上で、ヒトでの事象を評価できる適切な実験系を確立することが必要である。用量依存性についても確認が欲しい。 • 研究成果については、できるだけ早い時期での学会や論文等での発表を期待する。 • DNTにおけるミクログリアの役割をより明確にするなど、検討している毒性評価システムの有用性と限界が明確になるような研究推進を期待する。 		
評点	4.1/5点満点	継続の要否	継続

※食品健康影響評価を担う若手専門家の育成枠

課題番号	JPCAFSC20252509	研究期間	令和7年度～令和8年度 (2年間)	
代表者名	西浦 博	所属機関	京都大学	
課題名	ベンチマークドーズ法の活用を念頭においた調査および実装研究			
研究概要	<p>食品中の化学物質を中心とする毒性学的評価を通じてヒトへの健康影響評価を実施するにあたって、ベンチマークドーズ法 (BMD 法) が用量反応関係の標準的モデル手法として頻用されるようになった。これまでの国内におけるソフトウェア BMDMA は最尤推定法に基づく仕様であったが、ベイズ推定を活用することでより信頼性などのパフォーマンスに優れた推定が実装可能である。</p> <p>本研究では R stan などを利用して新たに2値データに対応した Bayesian BMD 法を実装するプログラムを再度実施する。推定パフォーマンスが最も良いことで知られるブリッジサンプリングを使うなど最新のエビデンスに依拠した実装を行う。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラミングコードの開発からガイドライン、チュートリアルを整備までを含む研究デザインであり、成果が期待される。 ・利用者が活用しやすい環境整備 (マニュアル、チュートリアル等) の充実を期待する。 			
評点	4.5/5点満点		継続の要否	継続

課題番号	JPCAFSC20252510	研究期間	令和7年度～令和8年度 (2年間)	
代表者名	関谷 直也	所属機関	東京大学	
課題名	食品安全に関する国民の意識の推移を把握するための手法の確立に向けた基礎的調査			
研究概要	<p>食品安全行政においては、単に食品のリスク評価を行うだけでなく、食品安全を実現するため適切なリスクコミュニケーション施策を実施する必要がある。そのため人々のリスク認知、関心の変化などの意識、リテラシー、評価制度や体制への信頼、情報面の課題などが調査で把握される必要がある。だが、これら調査は行われておらず、経時的に把握する調査手法も確立していない。よって目標設定や効果測定もできていない。</p> <p>本研究は食品安全に関するリスク認知、リテラシーの実態、信頼や情報面の課題などとその経時的変化を把握可能にする、信頼性が高く、かつコストも鑑みた最適な調査手法の指針を示すことを目的とする。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・調査設問の構成も重要な要因となると思われるため、研究計画の検討が望まれる。 ・食品安全委員会事務局と連携の上、研究を進めていただきたい。 ・本研究事業には「食品安全に関する国民の意識の把握」が含まれているため、食品安全行政に資する点を進捗状況報告の中に含めていただきたい。 			
評点	2.9/5点満点		継続の要否	継続

課題番号	JPCAFSC20252511	研究期間	令和7年度～令和8年度 (2年間)	
代表者名	小関 成樹	所属機関	北海道大学	
課題名	ヒト腸内細菌叢と胆汁酸組成の違いによるカンピロバクターの生残特性を基盤とする新たな用量反応モデルの開発			
研究概要	<p>カンピロバクターは汚染食材の喫食に伴いヒト体内に侵入するが、感染成立には幾つかの生体反応（胃酸ばく露，腸管内での生残定着、腸管上皮細胞への侵入等）を経る必要がある。従来の摂取菌数と感染結果とを単純に結びつける用量反応モデルから脱却して、鍵となる生体反応毎での生存／死滅を推定し、最終的な感染確率を予測する方法が有効である。本研究では既往研究では未検討であった感染の個人差の本質に迫りうる腸内細菌叢の違い、さらには腸内胆汁酸組成の違いがカンピロバクターの生残／増殖、腸管上皮細胞への侵入感染に及ぼす影響を定量的に明らかにして、数理モデル化することで、感染に至る確率を予測可能とすることを目的とする。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・ 諸条件の検討は必要と思われるが、世界でも根本的に不足している病原微生物の用量反応モデルを提案する意義は大きい。 ・ 胆汁酸組成の違いによる生残挙動の所見と Repligut system を用いて判明した侵入挙動の所見を、どのように用量反応モデルに組み込むのか、また、その妥当性をどう検討するのかが不明確である。また、カンピロバクターの細胞内侵入の検討に有用かどうか若干の疑問がある。 			
評点	3.4/5点満点		継続の要否	継続

評価項目及び評価基準： 中間評価

評価項目		評価基準
I	研究の妥当性	<p>以下の点に関する評価時点における妥当性、今後の研究体制及び研究計画の妥当性について評価する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 研究の体制（主任研究者、分担研究者の役割分担） 2 研究の計画、方法 3 研究の実施期間における遂行可能性 4 費用対効果
II	期待される研究成果の有用性	<p>評価時までの目標の達成度及び期待される研究成果の活用性と その有用性について評価する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 研究目標の実施期間内における達成の可能性について 2 食品健康影響評価への貢献等の可能性について 3 評価時までの論文（投稿中のものを含む）、特許（申請中のものを含む）、学会発表等の研究の成果について

(別添2)

令和8年度
食品健康影響評価技術研究の
採択課題（案）及び事前評価結果について

令和8年2月
食品安全委員会

研究・調査企画会議
事前・中間評価部会

令和8年度食品健康影響評価技術研究の採択課題（案）及び事前評価結果

令和7年9月16日から令和7年10月15日まで公募を行い、32課題の応募があった。研究・調査企画会議事前・中間評価部会において、応募内容を審査した結果、下表のとおり、7課題を採択課題（案）として選定し、事前評価結果として評価所見等を取りまとめた。

課題番号	JPCAFSC20262601	研究期間	令和8年度～令和10年度 (3年間)	
代表者名	和田 恵子	所属機関	国立がん研究センター	
課題名	小児期におけるビスフェノール類曝露が健康に及ぼす影響の疫学的評価			
研究概要	<p>ビスフェノール類は、食器や容器、玩具、缶詰の内側の塗料などに使用されており、飲食物へと移行することで、人の体内に取り込まれる可能性がある。内分泌かく乱作用を有することから、近年では、極めて低用量の曝露による健康影響が懸念されている。</p> <p>本研究では、日本人小児を対象とする疫学研究を基盤に、2011～2021年のビスフェノール類曝露の経年変化と同一個人でのビスフェノール類曝露の再現性を評価する（曝露評価）。さらに、小児期のビスフェノール類曝露が体格の成長と二次性徴、性ホルモン値に与える影響、精神的、身体的な影響（肥満、アレルギー疾患、行動発達、うつ、耐糖能、脂質代謝）を評価する（健康影響評価）。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・サンプリングと分析が順調に進行しており、ビスフェノールAの疾患との関連について、成果が期待される。 ・尿中ビスフェノール濃度の個人間変動をどの程度確保できるかがカギとなるので、個人内変動と個人間変動の大きさの比較について、先行研究を確認されたい。 			
評点	合計点	研究の必要性	研究の妥当性	研究成果の有用性
	16.1/20点	4.6/5点	3.6/5点	8.0/10点

課題番号	JPCAFSC20262602	研究期間	令和8年度～令和9年度 (2年間)	
代表者名	赤堀 有美	所属機関	一般財団法人化学物質評価研究機構	
課題名	食品健康影響評価における新たなアプローチによる評価方法 (NAMs) データを活用したウェイトオブエビデンス (WoE) 評価の体系化に関する研究			
研究概要	<p>ウェイトオブエビデンス (Weight of Evidence : WoE) 評価は、複数のデータの統合及び不確実性評価を通じて評価の信頼度を高める手法としてこれまでも使用されているが、近年、動物試験削減とメカニズムに基づく新たな評価手法 (New Approach Methodologies : NAMs) の行政利用の動きが広がりを見せる中、NAMs に基づくデータを活用するために必要な手法となっている。そこで本研究は、我が国の食品健康影響評価における WoE 評価の考え方と NAMs データを活用した WoE 評価、NAMs に関する不確実性評価の観点や WoE 評価の手順・留意事項を含む手引きを提案することを目的とする。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・NAMs に焦点を置いた WoE の体系化を踏まえた「評価手法の手引き」がまとめられれば、食品安全委員会のリスク評価に有用である。 ・NAMs データを取り入れた評価の体系化の範囲を広げすぎないように、焦点を絞った検討が望まれる。 ・国際的な動向を踏まえた知見の収集と、国内外の専門家とのネットワーク構築を積極的に進めることが、研究の質と信頼性を高めるうえで不可欠である。 			
評点	合計点	研究の必要性	研究の妥当性	研究成果の有用性
	16.0/20点	4.3/5点	4.0/5点	7.7/10点

課題番号	JPCAFSC20262603	研究期間	令和8年度～令和9年度 (2年間)	
代表者名	磯部 友彦	所属機関	国立環境研究所	
課題名	PFAS の曝露源及び体内動態解明のための介入試験による試行的調査			
研究概要	<p>本課題は、対面調査と曝露量を低減する介入試験に基づいて、有機フッ素化合物 (PFAS) の曝露源および体内動態の解明を目的とする。対面調査を実施し、曝露媒体試料および生体試料を採取する。曝露媒体試料の分析により PFAS の曝露経路と寄与率を明らかにするとともに、欧州で使用されている PFAS 曝露因子に関する質問票による曝露評価の精緻化を目指す。また、PFAS 曝露を低減する介入試験を実施し、期間中の体内濃度の変化から体内動態パラメータを算出する。本課題によって、曝露量と体内濃度の関係が明らかにされ、疫学調査等の成果に基づいた PFAS 曝露のリスク評価・リスク管理への活用が期待される。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・ばく露レベルと体内動態に関するヒトのデータが明らかにできる可能性が大きい。体内動態モデルの構築が期待される。 ・食品安全委員会でのリスク評価への貢献が期待できる提案である。ただし、ばく露源を明確にできるかどうか、また計画している介入試験で適切な対象者が選択できるかどうかについて留意していただきたい。 ・虫よけ剤の解析については、理論的背景やモデルの仮定等について、より詳細な説明が望まれる。 			
評点	合計点	研究の必要性	研究の妥当性	研究成果の有用性
	15.3/20点	4.3/5点	3.4/5点	7.6/10点

課題番号	JPCAFSC20262604	研究期間	令和8年度～令和9年度 (2年間)	
代表者名	佐能 正剛	所属機関	和歌山県立医科大学	
課題名	ヒト肝細胞キメラマウスを用いた PFAS の消失半減期予測とリスク評価			
研究概要	<p>PFAS は難分解性で、消失半減期が長いほど慢性毒性リスクが高まるが、新規 PFAS は疫学・毒性データが乏しく、ヒト半減期推定がリスク評価の課題となっている。従来用いられるマウスやラットは輸送能やアルブミン結合性がヒトと異なり、半減期を過小評価する。本研究では、ヒト型トランスポーターとアルブミンを有するヒト肝細胞キメラマウスを用い、体重補正スケーリング法である Single species allometric scaling を組み合わせて予測する。レガシーPFAS で検証したうえで新規 PFAS に適用し、半減期を高・中・低に分類、肝取り込みや毒性も踏まえ総合的リスク評価を行い、規制や代替 PFAS の選定に資することを目的とする。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> 動物実験の結果をヒトに外挿するために必要な研究である。ヒトばく露量と血中濃度の関係の推定にも役立つ。 ヒト肝細胞キメラマウスを用いた検討には一定の限界はあるものの、ヒトでは直接実施困難な PFAS の消失半減期予測を行うことは、PFAS のリスク評価に有用と判断できる。 			
評点	合計点	研究の必要性	研究の妥当性	研究成果の有用性
	14.0/20 点	3.8/5 点	3.4/5 点	6.9/10 点

課題番号	JPCAFSC20262605	研究期間	令和8年度～令和9年度 (2年間)	
代表者名	福家 辰樹	所属機関	国立成育医療研究センター	
課題名	国際的規制原則に資する、代替タンパク質の機能的アレルギー性評価と加工によるリスク変動解析			
研究概要	<p>新規食品 (Novel Foods) としての代替タンパク質の急速な普及は、従来の評価手法では予測困難な新規アレルギー性リスクの増大という課題を提起している。本研究は、ヒト IgE 機能評価系 (HuRa-40-EXiLE 法) と甲殻類・大豆アレルギー患者の臨床検体を統合し、昆虫食・豆類等の機能的な交差反応性を定量的に解析する。さらに、加工条件によるアレルギー性変化を分析化学的に解明する。最終的な機能的・分析的データは、Codex における国際的なアレルギー性閾値の科学的議論にも資する基盤的エビデンスを提供する。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・代替タンパク質のリスク評価を行う場合は、アレルギー性の評価は必要になる。 ・アレルギー性の評価系がしっかりと機能しているか、バリデーション及び対象となる食品の妥当性を明確に知る必要がある。 ・甲殻類、豆類以外の未知のアレルギーに対する評価の検討が必要ではないか。 ・国際的な規制や市場動向の変化も見据え、引き続き情報収集と知見の集約に努められたい。 			
評点	合計点	研究の必要性	研究の妥当性	研究成果の有用性
	13.6/20点	3.4/5点	3.3/5点	6.9/10点

課題番号	JPCAFSC20262606 (※)	研究期間	令和8年度～令和9年度 (2年間)	
代表者名	新井 沙倉	所属機関	国立医薬品食品衛生研究所	
課題名	レンサ球菌を原因とした集団食中毒事例リスク評価のための基盤形成に資する研究			
研究概要	<p>食品を媒介としたレンサ球菌感染症では、患者に咽頭炎、発熱、倦怠感、頭痛、関節痛などの症状が現れる。通常、レンサ球菌はヒト-ヒト感染する感染症だが、食品が本菌に汚染されていた場合には食品を介してヒトが上記の症状を呈し、集団食中毒事例が発生する。</p> <p>国内では、過去に A 群レンサ球菌および G 群レンサ球菌による集団食中毒事例が各々複数報告されている。しかし、原因食品の多くが不明であり、リスク評価に必要な情報が限られていることが問題となっている。そこで、本研究では、食品から A 群および G 群レンサ球菌を効率に検出および分離するための各種手法を検討し、本菌による食中毒のリスク評価を行うための基盤の整備を目指す。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> ・病原微生物のハザードの特定、ばく露評価のための基礎研究として有用である。 ・リスク評価の基盤となるレンサ球菌による食中毒の実態を明らかにする研究につながる。 			
評点	合計点	研究の必要性	研究の妥当性	研究成果の有用性
	16.1/20 点	4.5/5 点	3.9/5 点	7.8/10 点

※食品健康影響評価を担う若手専門家の育成枠

番号	JPCAFSC20262607 (※)	研究期間	令和8年度～令和9年度 (2年間)	
代表者名	芳賀 優弥	所属機関	大阪大学	
課題名	食品中に含まれるマイクロ・ナノプラスチックの体内動態解析手法の開発			
研究概要	<p>環境中のマイクロプラスチックおよびナノプラスチック (MNPs) は、これまで主に生態系への影響を中心に評価が進められてきた。しかし、MNPs はヒトにおける主要な蓄積部位が大腸である可能性が示唆され、経口経路からの曝露が懸念されている。実際に、飲料水、魚介類などからも MNPs が検出されている。一方、我々が曝露し得る MNPs は、ポリマー種、形状、サイズ、表面性状などが多様であることが知られている。しかし、このような環境中 MNPs の多様性を反映した体内動態解析手法は確立されていない。そこで本研究では、多様な MNPs 試料を活用し、それらを用いて体内動態解析が可能な基盤技術を構築することを目的とする。</p>			
評価所見	<ul style="list-style-type: none"> 多様な MNPs の体内動態に関する情報が得られる点で優位性がある。 多種多様な MNPs ライブラリの中から、標識 MNPs サンプルを合理的に選定することが、研究の信頼性や成果の妥当性を確保するうえで重要であると考えられる。 研究の推進においては、ヒトへの外挿性についても十分留意していただきたい。 			
評点	合計点	研究の必要性	研究の妥当性	研究成果の有用性
	13.8/20 点	3.8/5 点	3.3/5 点	6.8/10 点

※食品健康影響評価を担う若手専門家の育成枠

評価項目及び評価基準：事前評価

評価項目		評価基準
I	研究の必要性	<p>研究領域の趣旨に沿った研究内容となっているか評価する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 食品健康影響評価に関する研究であること 2 研究内容の科学的、技術的意義について 3 関連する研究の実施状況を踏まえ、独創性、新規性等について
II	研究の妥当性	<p>以下の点に関する研究体制及び研究計画、研究遂行の妥当性について評価する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 研究の体制（主任研究者、分担研究者の役割分担） 2 主任研究者等の既往の成果、能力 3 研究の計画、方法 4 研究の実施期間における遂行の可能性 5 費用対効果
III	期待される研究成果の有用性	<p>期待される研究成果の活用性とその有用性について評価する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 既往の成果、研究手法等を勘案し、研究目標の実施期間内における達成可能性について 2 食品健康影響評価への貢献等の可能性について 3 研究の成果の発展可能性について

研究・調査企画会議 事前・中間評価部会委員

・令和8年1月6日まで

(◎：座長)

磯 博康	国立健康危機管理研究機構 国際医療協力局 グローバルヘルス政策研究センター センター長
小澤 正吾	元・岩手医科大学教授
鬼武 一夫	日本生活協同組合連合会品質保証本部 総合品質保証担当
宮崎 茂	一般財団法人 生物科学安全研究所 シニアアドバイザー
山本 茂貴	食品安全委員会 委員長
浅野 哲	食品安全委員会 委員長代理 第一順位
◎ 祖父江 友孝	食品安全委員会 委員長代理 第二順位
頭金 正博	食品安全委員会 委員長代理 第三順位

・令和8年1月7日から

(◎：座長)

磯 博康	国立健康危機管理研究機構 国際医療協力局 グローバルヘルス政策研究センター センター長
小澤 正吾	岩手医科大学 評議員
鬼武 一夫	日本生活協同組合連合会品質保証本部 総合品質保証担当
宮崎 茂	一般財団法人 生物科学安全研究所 シニアアドバイザー
◎ 祖父江 友孝	食品安全委員会 委員長
浅野 哲	食品安全委員会 委員長代理 第一順位
頭金 正博	食品安全委員会 委員長代理 第二順位
春日 文子	食品安全委員会 委員長代理 第三順位